

# 曲目解説

新しい耳シリーズ Vol.3 ～The Pacific Rim:太平洋の環の中で～

## 1 別に意味はないけど

和太鼓の演奏をモデルに書かれた曲というのが、曲の構成がすでに西洋的である。すなわち、我々が聞く和太鼓は、能楽の構成形式である「序・破・急」というスタイルの雰囲気を持っているが、この曲は続けて演奏される5つのパートからなっているものの、冒頭から「急」のスタイルである。曲のテンポだけ見てもパート順に四分音符＝160、四分音符＝120、四分音符＝108、四分音符＝120、四分音符＝160 と、左右対称であり、パート1及び5は8分の3拍子、パート3は4拍子でありながら6連符が多用されている。パート2及び4はこれも「序」の雰囲気も含んだ「破」の部分であり、内容的にも左右対称のスタイルを貫いている。音楽も大きな音が出れば良いという次元を越えて、細かいフレーズを打ち出すことが要求されている。和太鼓と似ているのは、躍動感だけで、響きは似せようとしているものの、後は、西洋的なフレーズ感に裏打ちされた実に構成的な曲。タイトルはデューク・エリントンの「スウィングがなけりや意味がない」(It Don't Mean A Thing...If It Ain't Got That Swing.)の前半分を借りている。

## 2 エクタール

「エクタール」とは北インドの12拍からなるリズム型「ターラ」の名前で、このリズム型を128回反復することにより組み立てられているこの曲のタイトルともなっている。1回の周期が12拍というこのターラを、アクセントの位置をずらすことによりいくつかの小さなフレーズに分割し、そのフレーズの進行をユニゾンの状態から、ついには5人の奏者がそれぞれ異なるフレーズを奏するに至るまで導き、その後は逆のプロセスで再びもとのユニゾンに戻すというのが、この曲のリズム面から見た構成である。マリンバは3人で演奏されるがユニゾンからずれていくに従い、短い休符とアクセントの3者間のずれがこの曲独特の効果を生み出していく。また2人の打楽器奏者もそれぞれ6つの相対的音程を持ったフレーズを叩き出し、マリンバと一体となって旋律のうねりを作り出している。特に最初の旋律の流れに注意深く耳を傾けていただければその後にくうねりが素晴らしいものになるであろう。8分音符1つずれると行方不明になるという演奏者には恐ろしい曲でありながら、淡々として、次第に滔々(とうとう)とする流れに身を任せたい曲である。

## 3 プレスト・リトミコ II

「きわめて速く」という意味の「プレスト」と「リズムカルに(な)」という意味の「リトミコ」(いずれもイタリア語)をタイトルに持つこの曲は、3人のマリンバ奏者と2人の打楽器奏者(3つのトムトム、コンガ)そしてピアニストの為に書かれている。16分の3拍子(8分の3拍子)型のリズムが主となっているこの曲は、リズム型がとてもとらえやすく、タイトルどおりリズムを強調する場面もあれば、たっぷりと歌うことも要求されるという表情豊かな曲でもある。打楽器奏者は単にリズムを打ち出すというよりは、曲に加速度を与え、かつ華麗な彩りを添え、またピアニストは低音を比較的多く使うことから表に出にくい面もあるものの、一人で他の5人の音符数と同等の音を出すなどアンサンブルを支えかつ自ら歌うという重要なパートを演じている。

## 4 カルメン ポプリ(カルメン名曲集)

マリンバ四重奏によるジョルジュ・ビゼーのオペラ「カルメン」から、有名な旋律の花束。「第1幕への前奏曲」「ハバネラ(恋は野の鳥)」「セグディーリャ(セビリアの砦のほとり)」「ジプシーの歌(鈴を鳴らして)」「子供たちの合唱(上番兵と一緒に)」「第3幕への間奏曲」「闘牛士の歌(皆さんに乾杯をお返します)」「エスカミーリョの退場」

## 5 ボレロ

ボレロ＝だんだん速くなる曲?。もともとスペインの3拍子の踊りの曲、またはそのリズムが「ボレロ」であるが、モーリス ラヴェルが「ボレロ」を作曲して以来冒頭のイメージがあり、この曲もその例に漏れない。ただし使っている楽器は打楽器のみで、ボンゴ9、トムトム9、ペダル付きベースドラム2、ラージベースドラム1、ウッドブロック5、タンバリン5、ベル1という楽器編成で4人で演奏される。このうち太鼓系はすべて音程が定められている。冒頭からあの「ボレロ」の雰囲気であるが、すぐ変拍子を交え、強烈な1打も加えながら約15分間の「踊り」が続く。だんだん速くなるだけでなく途中で 四分音符＝68 四分音符＝85 が同時進行する部分があったり、また小節線が食い違ったまま並行して進むなど「よくこういう曲を書くなあ」というのが感想。